

原始林伐採の四年間

新潟県 小柳 信人

満州の鉄道第六六八部隊で入隊後間もなくで終戦、敦化で九月下旬、武装解除。

ソ連国境琿春に集合し、マンドリン自動小銃に囲まれて死の行軍で、ウラジオストク港を見降ろすクラスキーの天幕（戦利品）が建ち並ぶ収容所に収容されたのが入ソの第一歩であった。三、四千人くらいはいたと思うところであった。山腹は厳しいシベリアの寒気が襲いくる初冬の幕舎であった。

集合した翌日には移動命令が出た。二千人くらいの混成部隊が編成され、背のうに毛布、雑のう、防寒具という服装での移動、着いたところが丸太組みのコムソモリスク第二収容所であった。

技術者で裸電球を取りつける配線、残りの者は防寒材の運搬やベチカづくり、まずは防寒からと作業を始

めた。それでも朝になると防寒具に薄氷が張るといったぐあい、零下三十度くらいではないかと話し合い、身を寄せ合い材木片をベチカで燃やし続けての交替寝であった。満州当時とは比較にならない寒気が建物の粗末さと加わって一段と身にしみる。二、三日たったであろうか、千人くらいの作業隊に編成され収容所を後にした。

持ち物検査といつては寒い屋外に防寒具姿で並ばされ、所内の目星しい品物が持ち去られていったので、携帯する荷物も、軽くさせられた背のうと雑のうに縛りつけた毛布と飯盒、それに防寒服、防寒帽子という姿である。

カタコトと空の飯盒が歩くたびに寂しい音を立てる。歩哨に囲まれての無言の行軍、隊列を離れる者は遠慮なしに発砲されたので、疲労しても歯を食いしばって隊列に入って歩く、どこへ連行するのだろうか。

五時間くらいがたつたであろうか、夕日が沈みかけ寒気が忍びよるころに山が見えてきた。

馬小屋のような三角屋根の丸太小屋、裸電球がボツ

ンと一、二個ぶら下がっている。そこが目的地らしく先頭の足がとまったようだ。老いたロシヤ人が一人歩哨とともに丸太小屋に入って行った。間もなく中に入るように言われ、先頭から順序に中に入った。中は丸太の二段式で粗末ながらドラム缶が二個ほど置いてあった。

ロシヤ老人がわらを敷けと手まねをしたのでわらを上下に敷いて装具を置き、所内のかたわらにあった材木の中からたき火になるまき材を選んでドラム缶に火をつけた。ドラム缶が真つ赤になると暖かさが感じられるので、なるべく多くの炭火をつくって寝につく。空腹に耐えかねてわずかばかり残っていた携帯食糧を口に放り込む。バリバリと音を立て、かなたこなたで食べている。

格子なき牢獄、生きるだけの執着心が所内に充満している。

厳しい初冬のシベリアの夜が明けると黒パン二百グラムとわずかな大豆、塩、砂糖の配給である。付近の沼らしいところから水を運んで、持参の布を木の葉の

下に敷いて水をこし飯盒に詰めてベチカで湯をつくり、大豆を入れ、塩で味をつけ、湯で伸ばした砂糖を黒パンに塗り食事である。

食事後十分くらいもたつと集合、タポール、ピラーを持って二人引き西洋鋸を持った者と一班を組んで歩哨とともに原始林の山に登る。歩哨がとまった山道で伐採が始まる。

木を切り倒す、枝を取り払う、枝葉を焼く、五メートルくらいに木を切る。木をおろすところまで二、三人で運び、山を滑りおろす。

下ではおろされた材木を立方に積み上げる、ソ連人が何立方かを物差しのような計り棒で計り検査してノルマ計算、こうした飢餓に苦しみながらの強制労働が四年近く続き、多数の仲間たちが倒れ、入院して行った。

コムソムリスクからナホトカへ、船が岸を離れるまでは、生還の気持ちにはなれなかった。

ソ連抑留の思い出

岩手県 千代川 幸 吉

昭和二十年八月十日未明、私も開拓団にも、軍籍ある者は牡丹江・兵事部の指揮下に入れ、家族は安全と思われる所に避難させよ、との命令が鶴立県公署よりあった。

私も家族たちより一足早く家を出た。本部前に集合、鶴立駅に出た。どこかで銃声がする。鶴岡鉾山より来た貨物車に鶴立県内在郷軍人が乗車する。非常時の軍用車が十二日夜やっと牡丹江に着く。満鉄社員はどこにいるのか。

早速牡丹江で、満州第五〇三三部隊（豊浦部隊）小林隊に編入されたが、すでに牡丹江市内は火の海。第二陣地予定地の横道河子に集合の命を受け解散、各自で行軍した。途中で鉄道隊員から、内地広島に十年も十五年も草木が生えないほど強い爆弾が投下されたと

聞かされたが、それがどんなものか知るよしもない。横道河子で隊長より、日本は米英に降伏したことを聞かされ、そのとき若い見習士官が自殺したことも聞いた。山中に入ってゲリラ戦という話もあったが、結局武器を捨てた。

拉古病馬廠で一週間滞在し、東京ダモイということで、隊長以下一千人の大隊に編成されて行軍したが、あの日の朝、別れた家族たちの安否が気にかかった。牡丹江市内を通り過ぎ、三日目に、大型自動車に乗れとの命令で、行軍で疲れ果てていたし喜んでその車に乗った。

間もなく国境を通過したが、進行先は南東で、二時間ほど走ったところから左折して細路に入って十分間ぐらいのところ下車させられたが、そのとき元鉄道隊員だった人がその辺の地図を出して見たところをソ連の警備兵に見られ、没収された。そんなとき「みな

の者あきらめろ、この近くに興凱湖という大きな湖がある、それに入られて殺されるぞ」とか「いや日本に帰る船を待ったための待機だ」など悲喜両論が出たが、